

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)
在外研究
2013 年度研究成果報告書

研究代表者	所属・職名		氏名	
	文学部		林みどり 印	
研究課題	アルゼンチンにおける〈ユダヤ系〉表象の形成・変容と文化的機能に関する思想史的研究			
研修期間	2013 年 4 月 1 日 ~ 2013 年 9 月 18 日 (170 日間)			
経費	年度経費	SFR 助成額	所属学部からの補助額	合計
	2012 年度	円	円	円
	2013 年度	936,835 円	1,000,000 円	1,936,835 円
主な滞在国及び研究機関名	国名	研究機関名		
	アメリカ合衆国	カリフォルニア大学バークレイ校		

研究成果の概要 (図・グラフは使用しないこと)

19 世紀末から 20 世紀後半に至るまでの、アルゼンチンにおけるユダヤ移民・ユダヤ系市民をめぐる表象の形成と変容、ならびに現代におけるその文化的機能を明らかにする。19 世紀末以降、都市民衆文化においてユダヤ移民の表象はどのように形成され、現地の文化的・社会的・思想的文脈において変容したか、またオリガルキーや軍部、ペロニズム内の反セム主義的な表象戦略はいかなるものであったか、軍政下のユダヤ系市民への抑圧の記憶の表象が、現在の文化生産にどのような影響をもたらしているかを解明する。

19 世紀初頭以降の近代化の過程でラテンアメリカ諸国がとったヨーロッパ移民奨励政策は対アジア諸国向けの移民奨励策とは異なり、多分に「白色化」による人種改良の意味合いを有していた。なかでもアルゼンチンをはじめとする南米諸国(チリ、ウルグアイ、ブラジル等)ではその傾向が顕著であった。しかし、19 世紀末以降の都市の爆発的な拡大にともなう衛生問題や、社会コントロールの厳格化をもたらす「犯罪問題」の激増、アナキズムや社会主義運動等により、それまで「文明」や「資本主義的勤勉さ」を体現しているとしてきたヨーロッパ移民に対する見方は大きく揺らいだ。アルゼンチンにおいてそれはとりわけ顕著で、とくに同国で問題視されたのはイタリア人とユダヤ人であった。イタリア移民については、全移民総数に占める圧倒的な割合の高さがもたらす社会的プレゼンスからすれば、「移民問題」や「社会問題」の元凶とみなされたことにさほど大きな不思議はない。他方、ポーランド、ロシア、ドイツ等、ヨーロッパ各国から移民してきたユダヤ移民の移民総数に占める割合は、イタリアやスペイン出身者と比べて圧倒的に低かったが、にもかかわらず近代国家アルゼンチンの理想的構成を阻害する要因とみなされたのである。

従来、こうした「ユダヤ人嫌い」の言説の形成原理は、もっぱらヨーロッパ由来の反セム主義的な思想的・文化的影響に求められてきた。しかしながら、単に機械的な「輸入」言説としてのみ南米のユダヤ人差別をとらえてしまうと、現地アルゼンチン社会の歴史的な過程において生成・変容した「人種」言説のダイナミズムは覆い隠されてしまう。アルゼンチン社会におけるユダヤ系市民の表彰をめぐる諸問題は、現地の具体的な歴史的な文脈のなかで、固有の歴史的な諸出来事に即して考察されるべきである。そのためには、支配層における反セム主義だけでなく、民衆本や大衆雑誌が形成していた都市民衆文化の表象のダイナミズムが明らかにされなければならない。また、ドイツ・ファシズムの思想的影響が大きいアルゼンチン軍部によるユダヤ系市民のスケープゴート化や、反セム主義的表象戦略は、これまでの研究で大いに無視されてきた側面である。歴史的な連関性をとらえるためにも、また 1990 年代に起こったユダヤ人相互扶助組織の建物爆破テロに象徴されるような現代に残る反セム主義的な暴力の原因を探るためにも、これらの表象戦略についても考察されなければならぬ。以上の理由により、都市民衆文化におけるユダヤ表象の形成と変容過程を明らかにし、オリガルキーや軍部による反セム主義的表象戦略の分析を行い、さらには軍政下の抑圧の記憶が、民政期の文化生産にい

研究成果の概要 (つづき)

かなる機能を果たしているかを考察した。

〈ユダヤ系〉をめぐる文化表象の研究はこれまで盛んになされてきたが、その多くは東欧・南欧を含むヨーロッパ諸国やアメリカ合衆国についてであり、南米その他の地域に移住したユダヤ移民についての研究はいまだ途上にあるといい、歴史学においては移民史研究で中心的に扱われてきたが実証研究に限定的であり、本研究が扱う表象の問題は扱われてこなかった。他方文化研究の領域では、ユダヤ系に関する表象研究は近年盛んになってきているが、対象時期は 20 世紀後半と限定的であり、歴史的な角度からのアプローチは少ないといい。また政治思想史や社会思想史研究は、歴史的視座と反セム主義的言説の分析を扱いはするが、反セム主義思想のヨーロッパ社会におけるインパクトを重要視するあまり、その思想潮流の単純な「輸入」として片付ける傾向が強い。だが、アルゼンチン社会におけるユダヤ移民の文化的・社会的表象を、ヨーロッパ世界における反セム主義の単なる延長として理解することは、現地の固有な歴史的出来事を捨象してしまうことに等しい。

当該研究では、西洋世界から非西洋世界への「影響関係」に収斂させるのではなく、非西洋世界の歴史的・文化的・思想的なダイナミズムのなかにユダヤ人言説を置き直すことによって、〈ユダヤ系〉なるものの表象の歴史的・地域的多様性を明らかにするという、従来の研究に欠けていた点に準じた。本研究の構想の根幹には、西洋世界を思想や文化の構成主体とし、非西洋世界をその受け手として固定化する、伝統的な思想史研究に対する疑念が存する。ポストコロニアル批評以降、西洋による世界認識を「認識のゼロ地点」(カストロ＝ゴメス)と前提する研究は批判の俎上に載せられてきたが、いまなお旧態依然とした西洋中心主義は根強い。当該研究はそこへの異議申し立てとして遂行された。

また、これまでのアルゼンチンにおけるユダヤ移民研究は、歴史の分野では移民史研究が中心であったが、近年あらたな研究があらわれはじめた。文化研究の分野では、移民表象と文化言説の変性過程を分析する研究や、移民文学とアイデンティティ・ポリティクスを分析する研究、ホロコーストとアルゼンチンの人権侵害の比較、メディアにおける表象分析が増加傾向にある。また政治思想史・社会思想史研究の分野では、アルゼンチン軍部と反セム主義、ポピュリズムと反セム主義等の関係を分析する研究が盛んになってきている。当該研究は、こうした一連の新しい諸研究に倣し、南米における反セム主義的言説とその表象はどのように切り結び、いかなる言説の布置のもとに「記憶のホロコースト化」(アンドレアス・ヒュイッセン)へと編成されていったかを、歴史・文化・思想史研究の横断的分析を通じて明らかにした。また、ユダヤに限らず南米社会における人種主義的な言説が、異なる歴史的なコンテキストのなかで(たとえば世紀末キューバにおいて)、文化言説とどのように戦略的に結びつき、それが国民国家言説とどのような関係を取り結んだのかについても発展的に考察を行った。

キーワード (研究内容をよく表しているものを 5 項目で記入)

[ユダヤ (人)] [文化表象] [人種主義] [ホロコースト] [記憶]

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

林みどり「トランスカルチャーレションの誕生——フェルナンド・オルティスと未来形の語り」149～174 ページ (久保田浩編、リトン、『文化接触の創造力』、2013 年、272 ページ)

※この(様式 2)に記入の、成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4 縦型横書き 1 枚・自由様式)を添付すること。